

# 第69回日本栄養改善学会学術総会 「栄養学雑誌創刊80巻記念シンポジウム —より良い学術雑誌を目指して—」

松崎 広志<sup>\*1,\*2</sup>, 太田 雅規<sup>\*3,\*4</sup>

<sup>\*1</sup>栄養学雑誌編集委員会委員長 <sup>\*2</sup>東京農業大学応用生物科学部栄養科学科 <sup>\*3</sup>栄養学雑誌編集委員会副委員長

<sup>\*4</sup>福岡女子大学国際文理学部 食・健康学科

## 1. はじめに

栄養学雑誌は、1941年に創刊され、2022年2月に第80巻が刊行された。そこで、創刊80巻を記念して、これまでの栄養学雑誌の歴史を振り返り、より良い学術雑誌を目指して研究方法や論文作成について学び、今後の栄養学・健康科学と栄養実践活動を考える機会として、第69回日本栄養改善学会学術総会におけるシンポジウム、「栄養学雑誌創刊80巻記念シンポジウム —より良い学術雑誌を目指して—」を企画・実施した。

## 2. 開催日時と開催方法

開催日程は、2022年9月18日（日）13:30～15:30。  
開催方法は、現地（川崎医療福祉大学本館棟4603）およびZoom参加によるハイブリッド形式にて実施した。

## 3. 内容

本シンポジウムは5人の先生方からご講演いただいた（表）。最初に「イントロダクション」として村山先生か

表 シンポジウムの演題と演者

シンポジウムⅣ 「栄養学雑誌創刊80巻記念シンポジウム—より良い学術雑誌を目指して—」
「イントロダクション」
村山 伸子（新潟県立大学人間生活学部 教授／ 特定非営利活動法人日本栄養改善学会 理事長）
「管理栄養士と研究 —現場の管理栄養士の立場から—」
水間 久美子（千葉大学医学部臨床栄養部 管理栄養士）
「研究デザインと報告の質を高めるためのガイドライン」
上岡 洋晴（東京農業大学大学院農学研究科 環境共生学専攻 教授）
「学術論文の作成 —準備から執筆まで—」
永井 成美（兵庫県立大学環境人間学部 教授）
「栄養学雑誌の過去と未来」
由田 克士（大阪公立大学大学院生活科学研究科 食栄養学分野公衆栄養学 教授／ 元栄養学雑誌編集委員会委員長）
質問コーナー

ら、栄養学雑誌の創刊から80巻刊行までの歩みをご紹介いただいた。水間先生からは「管理栄養士と研究 —現場の管理栄養士の立場から—」として病院の管理栄養士の立場から、先生ご自身の管理栄養士と研究のキャリアパスについて、上岡先生からは「研究デザインと報告の質を高めるためのガイドライン」として研究計画の種類や報告ガイドラインについて解説いただいた。「学術論文の作成 —準備から執筆まで—」として論文作成の姿勢（心構え）、準備、執筆、投稿までのポイントを永井先生ご自身の経験を踏まえてご講演いただき、由田先生からは「栄養学雑誌の過去と未来」として、これまでの栄養学雑誌の歴史と学術雑誌として目指すべき方向性についてご提案いただいた。そして、「栄養学雑誌」、「研究計画や結果の分析」や「論文化」などに関する質問を本学会員から事前に募り、その質問に対してシンポジストの先生方や編集委員会がお答えする質問コーナーを最後に実施した。

## 4. 「質問コーナー」の質問と回答

「質問コーナー」にお寄せいただいた質問と質問に対する回答を掲載する。

### 質問1

修士と博士別の、大学院生の心得を教えてください！（やっておくべきだと思うこと、おすすめの習慣、若手のうちに身に付けておきたいスキルなど）

### 質問2

若手（初学者）のときに、目指す研究者像に向けてためにやったこと、またはやらなかったことなどありましたでしょうか？

### 回答

2つの質問を合わせて回答させていただきます。一研究者として大学院生（若手）の時に心がけていたことは、積極的に学会や勉強会に参加して多くの研究者とつながりをもつことです。会に参加した際には、多くの方

に自分から話しかけて質問をしていました。それが自分の研究の幅を広げることにもなったと思いますし、キャリアアップにつながったように思います。

修士課程と博士課程で心得は大きく違わないと思いますが、修士課程は2年間と期間が短いため、やるべきことに優先順位をつけて、どうしたら1つの研究としてまとまるのか考え、効率的に研究を進めるとよいと思います。博士課程の3年間は、本当の意味での研究の面白さが分かってくる時期だと思いますが、研究成果を論文としてまとめないといけません。そのため、論文投稿時期の目標を決め、そこから逆算してやるべきことをこなす必要があります。

若手の時にやっておくとよいと思うことは、「将来、自分はこんな研究者になりたい」というロールモデルを明確にしておくことです。それが研究を続けるモチベーションにつながるように思います。大学院生の皆さん、若手の皆さん、一緒に頑張りましょう！

### 質問3

研究者として生きる上で、プライベートとの両立することなどライフステージで大変だった時期はありましたでしょうか？いま大学院生で、とても忙しい日々を送っているのですが、それは研究歴が長くなっても変わらない（むしろ加速する）のでしょうか？

### 回答

仕事・研究もプライベートもどちらも人生において大切な要素だと思います。研究を究めるためにプライベートを犠牲にする、プライベートを充実させるために仕事を手放す、という発想ではなく、はたまた仕事とプライベートの両立やバランスに捉われすぎることなく、自分（や家族）が幸せになるために、限られた時間を自分が納得できるようにどう使うか（人に任せられることはないか、も含めて）、人生を通して考えていくことが大切なのだと感じています。私自身もまだその答えを模索している最中ですが、仕事・研究とプライベート、どちらも“両立やバランスを取る”が真の目的ではないはずだと考えています。

自分自身を省みても、論文投稿時期などは、曜日や時間の関係なく、集中して取り組みたいと思う一方、例えば子育て中は、こちらの都合に関係なく子どもの用事（学校行事から突発的な体調不良に至るまで）にも対応しなくてはならず、“忙しさ”という点からは大変かもしれません。でもそんなときも、自分ひとりで物事に対処しようと気負わず、誰かに頼ったり、助けてもらう視点を持つことがとても大切だと思います。そして研究者として生きるならば、研究成果に対するプレッシャーが常に

ありますから、決して楽な毎日ではありませんが、良い仕事をするには、プライベートの充実がやはり大切だと考えています。

現代社会において、ライフプランをシミュレーションすることはとても大切ですが、どんなに先々のことを考えていても、人生は自分の想定通りにはなかなかいかないものです。おっしゃる通り、研究歴が長くなれば、忙しさは加速するようになっていますが、実際に自分でやってみて大変なのか、忙しさの中に面白さを感じるかどうかは、考えているだけでは分かりません。当初の計画と違ったからといって悩むのではなく、何事にもどんどんチャレンジして、時に失敗することあっても、自分だけの充実した人生を創り上げていけたら、素敵だと思います。キャリア形成のお手本となるような先輩が学会会員の中にたくさんいらっしゃるのでも、研究活動を通して勇気を受け取る機会が多々あると思います。ともに頑張っていきましょう！

### 質問4

仕事としてアカデミアで研究することと、研究所で研究することは求められるものは違うのでしょうか？

### 回答1

ご質問内容の「アカデミア」は大学などの教育研究機関、および国立や公立の研究所、「研究所」は企業の研究所と定義し回答させていただきます。

アカデミアにおける研究は自らの専門分野をベースに、「新規性・独創性」などに着目して競争的資金を得て、学会発表や論文など調査研究成果を公表することで、「自らの手で科学を発展させること」が求められます。

また、アカデミアの中でも、大学などの教育研究機関と、国立や公立の研究所は求められているものが異なる部分もあります。国公立の研究所は、公的な立場から公衆衛生や保健医療等の分野において（所管する組織により異なります）、国の政策や行政の科学的根拠となる、またそれらを支援する調査研究が求められます。大学における研究は、研究者（研究室）主体で研究を進めることが基本ですので、自由な発想で調査研究を行うことができます。そのため、大学では基礎研究や企業と一緒に取り組む共同研究など、多種多様な調査研究が求められます。

企業における研究は、企業の経営計画のスケジュールや予算内で、「企業の利益につながる」を前提に研究デザインを組んで成果（論文発表、特許など）を出すことが求められます。また、一定水準（将来的に見込まれる売り上げ等）への到達が求められることを前提として

います。

また、別の視点として、アカデミアと企業とでは「研究成果が社会に活かされるプロセスが違う」ことから、求められるものにも違いがあると思われます。

アカデミアの場合は、特にひとつの企業に限定されることはないため、より広い視点でその研究成果を発信することになります。そのため、対象となる研究分野でどのような研究成果（科学的根拠）が必要か、という公益的な視点が求められます。

企業の場合、研究成果は自社の製品やサービスとして社会に活かされることになります。よくマーケティングと言われますが、自社の強み、自社の顧客、競合の動向などを踏まえて、その研究が精度高く社会で活用されることが求められます。もちろん、研究部門だけではこれらすべてに目配りできないため、事業を統括する部門と、進捗会義などを通して綿密に情報交換しながら進めることになり、コミュニケーションをしながら、これらの全体像を理解することが求められます。

一方で、社会全体をよりよくすることが目標であり、研究成果が社会で活用されて初めて価値が発揮されるという点は、企業もアカデミアも同じと思われます。

#### 回答 2

アカデミアでの研究はテーマの選択が研究者自身の好奇心や興味などが優先され、かつ何が明らかになっていないかを明確にして、研究テーマを選択しているはずで

す。さらには、ここで得た研究成果は人類の発展に寄与すべく、独自の視点などを加味して研究論文として発表（論文化）することが最重要視されます。

一方、企業での研究（これを「研究所で研究」とします）でも、求められるものはアカデミアと同様であるものの、研究テーマの選択に際しては自社の製品化への活用、すなわち企業において営利目的が重要視されます。一般的に、研究資金は販売・製造部門が得た利益を原資とし、研究部門でもより良い製品化を目指すことが主眼になってきます。

また、企業での研究成果はその企業が独占的に使用する権利を得るために特許化が優先され、次いで必要があれば研究論文として発表されます。

#### 質問 5

世界の食業界を見ていると、包装前における栄養プロフィール表示や子供受け広告規制などの栄養的である食品を選択できるような行動変容が活発化しているように見受けられます。世界と日本の流れのギャップが大きくなっていると感じますが、どうしてこのような現象

が起きているのでしょうか。

#### 回答

栄養学雑誌では、80巻2号で「栄養プロフィールモデル」についての論文が2つ掲載されるなど、わが国でも今後着目されてきているテーマであると考えます。大学等の研究機関や病院、自治体、学校現場等ではすでに先進的な取り組みが行われていると考えられます。栄養学雑誌には「総説」や「原著論文」、「研究ノート」、「実践活動報告」、「資料」、に加えて「会員の声」もありますので、是非、積極的に栄養学雑誌へ投稿いただき、皆様の日々の活動を多くの学会員に周知いただければと思います。

\*\*\*ここからは第69回日本栄養改善学会学術総会シンポジウムⅣにおいて、シンポジスト・座長から回答させていただいた質問とその回答です\*\*\*

#### 質問 6

たくさん書く秘訣、初めての論文化にあたっての目的・方法・結果・考察を書くポイント、論理的に書くポイントについて助言頂きたいです。

#### 質問 7

統計解析の手法について、詳しく書く必要がありハードルとなっています。助言を頂いたりする機会はありますか。

#### 回答

2つの質問を合わせて、シンポジストの先生方からご回答頂きました。概要は以下の通りです。

#### シンポジスト A

主にたくさん書く秘訣について、まず自分の手元にどのようなデータがあるのか、どういったデータを蓄積することができるのか、といった点がまず大事だと考えます。現場で仕事をされている方は、改めて調査を行いデータを入手することはできませんので、蓄積されたデータから、普段疑問に思っていることを、どうやって解析して導き出すことができるかを糸口に取り組みされると、それをもとに更に課題（テーマ）が深まり、新たな論文を書けるようになると思います。

#### シンポジスト B

統計解析にハードルがあることについては、基本は教科書をしっかりと読むことが大切だと考えます。研究は、研究デザインが99%だといわれているので、統計解析の前に何のために研究をするのかという枠組をしっかり頭の中に作ることが大切だと考えます。しかし、教科書を読んでも分からないことがあると思うので、その際

は、詳しい人に聞くことが一番だと思います。専門の部署等にアドバイスを求めるということが一番だと考えます。

#### シンポジスト C

統計解析は躓く人が多いと思います。やはり勉強することが大事だと思います。しかし、一度論文を書ききると、自分の行った解析が後で分かってきて、そこから広がることもあるので、まずは1つ書くことにチャレンジすることが大切と考えます。

#### シンポジスト D

実践栄養学研究セミナーに参加したことがあります。各支部で行われている実践栄養学研究セミナーでは、研究デザインや統計解析の手法について、質問したり教えて頂いたりできるので、そのセミナーを利用することも一つの方法だと考えます。

#### 座長から

セミナーに加えて、参考図書として「初めての栄養学研究論文 人には聞けない要点とコツ (監修 日本栄養改善学会, 第一出版株式会社, 2012年)」にも統計解析について、細かく書いていますので、参考にして頂くとういでしょう。

#### 質問 8

ファーストディシジョンの期間について教えてください。

#### 回答

過去一年間の原稿の受付から初審結果送付までは、おおよそ1か月となっております。

#### 質問 9

査読者の選定方法はどのように行っていますか。

#### 回答

投稿論文の学術分野に深い見識を持つ査読者を選出しています。

#### 質問10

原著や研究ノート、実践活動報告の違いは何か教えてください。

#### 回答

原著は「独創性・新規性があり、かつ科学的に価値ある事実を含むもの」、研究ノートは「原著論文としてはまとまらないが独創性・新規性があり報告に値するもの」、実践活動報告は「医療機関における栄養・食事指導、給食施設における食事計画とその提供、健診後の事後指導、食育活動、行政機関等における公衆栄養活動等について、実践活動により得られた成果や方法論などを客観的に整理・報告したもの」です。

なお、詳細は、投稿規定、栄養学雑誌76巻1号の巻頭言をご参照ください。

#### 5. 最後に

栄養学雑誌は、栄養実践活動を支える科学的根拠を学会員および関連の研究者・実践者に提供する場として、本学会会員の学術情報交流の重要な場として、その役割はますます大きくなっていくものと思われる。今後の栄養学雑誌がより質の高い論文や実践活動報告を掲載し、栄養実践活動を支える科学的根拠を提供できるよう、編集委員として取り組んでいくとともに、会員の皆様のご支援とご協力をお願いしたい。

#### 6. 謝辞

本シンポジウムの企画・実施にあたりご協力いただきました、栄養学雑誌編集委員会の先生方に心より感謝申し上げます。